



若林 秀樹

中学で日本語教室を担当していた時、同僚の数学教員から次のような相談を受けました。「担当するクラスの1年生のブラジル人男子生徒が授業を理解できないようなので、数学の時間は日本語教室に通わせてあげてほしい」

真面目に話を聞いているので

### 普通学級で学ぶ

ですが、黒板を時間内に写し終わらず、練習問題にも手が付けられないとのことでした。「何もしてあげられないので、彼も授業にいてつらいはずだ」と付け加えました。皆さんも教壇に立たつてもりどころ対応するか考えてみてください。多くの方がこの教員と同じ考えかもしれません。

私は、引き続き授業に参加させてほしいと伝えました。彼は

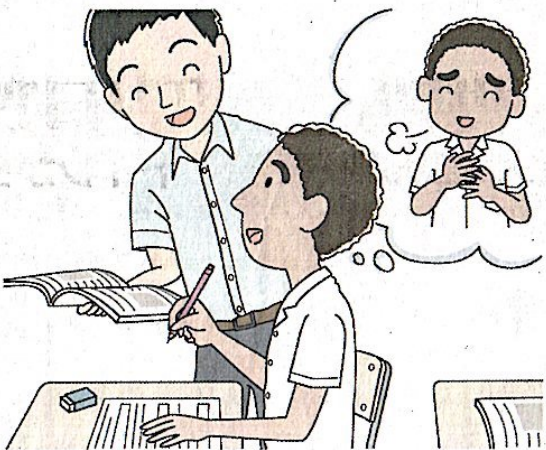
## 授業に参加 意欲引き出す

日常会話もでき、学校生活を送るのに問題ありませんでしたし、数字や記号も理解できていたからです。中学入学直後は日本語教室に通っていましたが、この時には学習用語が難解な国語と社会の時間以外はクラスの授業に参加するようになっていました。

その際、教員には次のお願いをしました。授業内容とは別の易しい計算問題を用意して始まるの時に渡してほしい。途中で1、2回でいいので様子を見て、授業後に採点しながら「次の時間も頑張ろう」と笑い掛けてほしい。他の生徒と同じにできなくとも、数学の学習に参加した事実をつくってあげてほしい、と。

日本語教室で学習する子どもは、クラスの授業に戻ることに不安を感じています。この教員の提案通りに行ったら自信を失い、もう参加できなくなってしまう。たとえ学習内容が違っても教員とつながることができれば「居たいんだ」「先生は自分を認めてくれた」と感じ、「早くこの先生の授業を理解したい」とやる気になります。

教員は納得し、私のお願いを聞き入れてくれました。教員自身も、言葉が通じない生徒を前にどうしてよいか分からず悩んでいたのです。3カ月後、男子生徒は全ての授業に参加できるようになりました。外国につながる子どもにとって、日本語教室での学習も大切ですが、できるだけ多くの大人が関わり普通学級で学ぶことも同じくらい必要です。



画・原澤美紀

(宇都宮大客員准教授)

北日本新聞 (富山) 2019.8.4 (日)